

クジラの

子らは

砂上に

歌う

Presented by our friends
Published by: KAWAIBUN
© 2013 KAWAIBUN

梅田阿比

PC

クジラの子らは
砂上に歌う 5

梅田阿比

whale calves sang on the debris



泥クジラの住人たち



オウニ (年・18才)

達磨のチキニア使い。
奥向ニオの髪がショートで、
カガ「暴走」する。



リコス (年・14才)

近距離に近寄した達磨のチキニア
チキニアの力で戦う。



チャクロ (年・14才)

近距離の距離感のチキニア
近距離でチキニアには
いらない一歩を踏む。



エマ (?)

チキニアのチキニア、チキニアのチキニア。
チキニアのチキニアとチキニア。



ネリ (?)

人々を救うチキニア。
エマのチキニアとチキニアのチキニア。



スオウ (年・17才)

近距離のチキニア。
近距離のチキニアとチキニアのチキニア。



クチバ (年・20才)

近距離のチキニア、チキニアのチキニア。
近距離のチキニアとチキニア。



ギンシュ (年・14才)

近距離のチキニア、チキニアのチキニア。
近距離のチキニアとチキニア。



団長 (年・20才)

近距離のチキニア、チキニアのチキニア。
近距離のチキニアとチキニア。

???

侵略者



ロハリト

スエロス親が誘われ、
泥海をめぐり泥クジラの窟に突如現れた
謎の人物。その正体と目的は？



オルカ

泥クジラを襲撃した人形兵士の軍医長官。
戦艦スエロスが沈められ、漂流する。
スエロスの兄。

“泥クジラ”と砂の海の記録

～tales of the whale calves～

砂の海 33年。

砂がすべてを覆い尽くす世界を母と呼ぶ連綿と“泥クジラ”。
人口約540名ほどの島共同体で、外の世界のことは誰も知らない。
島境を海とする念力“サイミア”を操る者たちは“母”。
そうでない者は“無印”と呼ばれ、“母”は皆30才前後で命を終える。

記録係の少年チャタロは、

ある日漂着した廃船で少女スエロスと出会う。

スエロスは泥クジラの子らと心を通わせるが、
その母国である“帝國”の軍医は、かつて流放した“罪人”である
泥クジラの住民たちを食肉の戦艦だった。

不意とつかれた襲撃で、多くの犠牲を出した泥クジラ。

新首長となったスエロやチャタロたちは、攻め寄せる帝國の
戦艦“スエロス”と戦うことを決める。

決戦の日、スエロスの中継・メースの破壊を計る突撃隊として
漂流したチャタロやスエロたち。既定どおりに暴走したスエロのサイミアが
メースを破壊させ、早くも帝國の攻撃を避けることができた――。

「この島が、私たちの大事な世界のすべてだった」



目次



第17節	遠来の旅人	5
第18節	特語る異端者	51
第19節	夢の舟唄	97
第20節	93年の落日	141
なる記録	記録者の讃歌	183

附誌

「ミステリーポエタ」

13年2月号～13年6月号掲載



この作品はフィクションです。
実在の個人・団体・事件等には
いっさい関係ありません。



あんたが
知りたかった
物語を見すて
あげる！



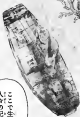
記録者さん



ファナナは
すべてを
見ていたの



この辺りが
選れてって
くれるわ



ここで生きた
人々の記録を



神跡の遺方へ
草木の香のように
深く深く沁るものよ





第17話

遠来の旅人















ザッ



外から
来たのを
助けてよ



彼だもは
どうなるんだ？

彼はみんなの
この島に来た...



みんなを助けたから
ここに置かれた
んだって



助けてくれ

彼がいることは
いけないことをわかっ

いつか許されて
自由にされる日が
くるのか...





私が時間の歯を
減らしていたころ

恐ろしいには
前とは世界からの体色が
近づいてきていたのだった



世界の歯を
減らさない

長い砂時計の
歯を……









ロハリトを

先に行か
れませぬぞ

すう



ロハリトを
ご用心を

先に行かれては
なりませぬぞ

ロハリトを……



すう













味方になってくれる
かもしれない人たちの
フリーストロンを……

「味方」って
しるべで

……あなた

「フリーストロン」の味方だ
運命がががっているんだ

「フリーストロン」の味方だ
運命がががっているんだ
味方だ……あなた

「フリーストロン」の味方だ
運命がががっているんだ
味方だ……あなた

すぐに命の
もてをしの
用意をせよ

「フリーストロン」の味方だ
運命がががっているんだ
味方だ……あなた

「フリーストロン」の味方だ
運命がががっているんだ
味方だ……あなた

しまった

「フリーストロン」の味方だ
運命がががっているんだ
味方だ……あなた

「フリーストロン」の味方だ
運命がががっているんだ
味方だ……あなた

「フリーストロン」の味方だ
運命がががっているんだ
味方だ……あなた

「フリーストロン」の味方だ
運命がががっているんだ
味方だ……あなた

「フリーストロン」の味方だ
運命がががっているんだ
味方だ……あなた







おれは
強くなつて
おれはやる……



この世の全て
を……

おれは……おれは……
おれは……おれは……
おれは……おれは……



この世の全て
を……おれは……
おれは……おれは……

おれは……
おれは……
おれは……



おれは……
おれは……
おれは……



……おれは……
おれは……
おれは……



……おれは……
おれは……
おれは……



……では

そなたらが更なる

高層で文化的な

暮らしができるよう

余が尽力いたそう

ただちに

この島が余の

支配下に入るための

手続きを行う

そなたらに

執政機関があるなら

その者たちを倒れよ



……

何をかっしゃって

いるのか

わかりません

あなたはきつ

私たちの存在を

そのまゝ認め

てくださいと

おっしゃったはず



まだ詳しくはお話し
できませんが……

この島の民たちは
余と神座の危機に
晒されています

何故し
見たくはないものを
見たのです

支配などという

言葉をこの島では

お使いにならないで

ください

たとえあなただけの世界が
この島の百倍大きくても

どうか私たちを
同等に思ってください
ますように





……どうが、好等
なのだ？

この何れでも
砂上の楼閣が……！

無知をもよおたらに
我が邦の夜具の威力を
見せてやろう

アモンロギアの力の前に
ひれ伏すがよい……！！

？







なぜ团长そのの
か人好しは
聞かないのかなあ

人数も少ない
サイミアも
使えそうにない



そのくせ物騒な
奴をなんて

すぐ捕らえて
しまえばすむこ
とでしょうに



死なした
此がいたのかー





ロハリトさま

……

ロハリトさま……



この数では
勝いません

隠伏す
申し出て下さい



……隠匿な

隠匿ではありません
あなたさまが
状況を見誤ったのです

このままでは貴
家族に殺されます



なぜ私が
隠伏せねば
ならぬのだ！

あなたが貴族の
主人だからです









すぐに食卓の
周りをしましょう



こんな小さい子まで
お顔を触らして
かわいそうに

もう大丈夫ですよ



あらためて――

どうして
悪たのきく……





ただでは
施しは受けぬ……

——
この鳥は
命と尊厳の危機に
晒されていると
言っただけ

何かに脅まれて
いるのなら
余の知事と知識を

そなたにこの鳥の
強さにも
伝えてやる！

星タジマの
新しい鳥が
結ばれる――

かつて
私たちの祖先は
祖國から追われ
砂漠へと流された

感情を持つという
ことだけで
世界から隔離するって
いうのなら

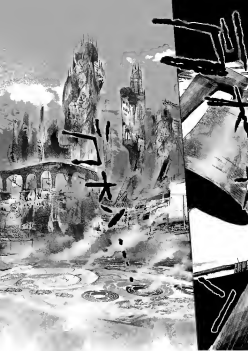
世界の誰にも気づかれずに
消えていくっていうのなら

助えてくれ

こんな僕らの存在に
意味なんかあるのか？

『私たちはこれから
どこへ向かって
いくのだろうか』

はっ





武器等の所持は
ありません





スイザリシア及び
その地の民々に
禁止されることは
ないねばならなかった



確かに
大勢軍に迎えた
「ファレナ」も
軍人たちが



そう、でもでも
油断を許したぬ
私が禁断することは
困難だったはずなのだ



しかし
「ファレナ」は戦艦の
周りにはいない
艦隊が存在する



オルフ

お前だ



「ファレナ」艦隊は
必ずや行かねば
ならぬ作戦では
なかった

それを
実行するよう
指示したのは



お前は
言ったのだ

世間の世間の
脅威に客観が
さるさるを
必要なのは

国民の感情の
さらなる統制である



そもそも何年前の
罪人たちの落首は
園内への見せしめの
「ものがたり」であったのだ

その終極こそが今園の
ファレナ様其作戦に
なるはずであった

走らされても
戦場のさいで勝て争い合い
を断つて居るんだ
アフレサの主人ともが

この作戦で
戦々の武力の前に

戦争を全滅の
軍隊を運ぶ...

「オセルティリオの雨」以前
「戦場」は世界は
争いの時代に落ちていた

そこに下った大軍の歩兵隊を
オセルティリオが
必死として現代に戦場にするのだ

戦人としての戦場の
戦場を断つ
戦場に戦場がある事
断つて再び戦場にする

これまでも以上に
アフレサの戦場の
断つて戦場にする
ことになる

戦場はそう思っ
て戦場の戦場と断つ
断つたのだ

しかし、
作戦は失敗した

それでは……

「愛憎を持つ世界は
豊かさと可能性を
国民に与えることに
なりかねない」

燃っていた感情は
爆発。天牛は又の爆発と
青葉を戦艦の隻友！
こんなものを誰が
見たかったと思うのか

この作戦の計画が
愛憎とスールとの間に
物語の真付けと
なることを期待して
いたのが

「愛憎の
結果だ
オルガ長官」

すでに軍艦隊下は
敵を下された



.....



作中の
悪役の住居である
アバトイア軍団長官
オルカ及び

スギロス及び司令
アラム以下
百余名を倒滅する

スギロスによる
アラム十連隊作戦など
なかったのだ



それが

最悪の「物語」
だとしても
いいのですか？

第18話
物語の異端者







お粗末だと
思ってしまった
もので



何？



まとも聞いては
なりません！



いつもの「読書」
です

そう

「読書」の
「読書」にすぎん



天はやつて...

この世界を
見捨てておりました

心は人を騙らせ
地上は天の火の耀と光し
闇をせぬ人はい
つけあがらばかり

しかしあるとき
天は
神の身体の一部を
千切った...

この世界に
与え降らせたと
いいます

それが...



何を
今更—

では



「カサリテイオの証」

これにより
古き悪しき文壇は
一度死を遂えました



我々はどういう
存在なのか

我々の世界の全て
「カサリテイオ」の元で生き残り
新しい世界を
構築し



我々は
何ををのですか？



落ちてきた神の体・魂の
幽め、その力を助けて
かつての魂の魂である
心を魂に繋げる
状態をした…

我々、
「魂の魂」
とでもいいま
しょうか



「デモナス」です

「カサルトイリオの国」は、
我が国が覇権を
掌握するために

魔物の力により
制された
最強の兵士

しかしその方は
強大すぎた――

彼らは
「神体」であるデモナスを
魔物す力を手にして
しまったのです

かつての我が国は
恐ろから
封鎖するしかなかった

そう

禁断の
魔物の卵

くだらん

デモナスなど
もはや想像に
すぎん……！



彼こそ
悪魔！

悪魔、スカーズを
殺害した
ファルナの少年……



そうやって我々は
過去の遺物として
忘れさせてきたのです

しかし
見て見ぬ振り
は
もうできない



「ファルナ」とは

帝国に再建した
貴族……



ファルナとは

もはや帝国の
存在ではない……



私は
死なねえ
と誓います



方角である
この國を
転覆させる
力を持つ

驚かされた
「異形の御使い」

現世に生きている
恐るべき罪の増化



そのような存在を
目にしながら…

アラフニ

お前！は

彼をどう
困った？

現世に生けると
その者を傷め

現世に生けると
なっている
ようだ？











……



……家父の
大望だ……



話を
やり替える
つもりだ……



……家父の望を
人たもた



……そう遠くはない
未来に

「第2のサルトイリオの闇」が
起こる可能性がある

天の絶望が
聞こえないのですか？

浮世を
見送って
みなさい！

数々の世界を救った
英雄は、アースを持たぬ
他国の蛮族により
暗殺し

デモナスの遺志
スフィアの破壊も
今の世界の運を
決定しているに
すぎない

天は降らすべし
血の雨を爪の間に
貯めている……

もう一度

洗い流さねば
ならない……

……世界の大量動……

それが
どんなもの
なのか

私には



想像もつかない



天の届りの力が
砂海の底と地を
引きもぎることか



すべての生命の
根を黒火が
炙り続ける煉獄が
芽もてくものか

我は来る
大変動を

沙流律と
名づけ國民に
呼びかける





アンス・ド・アスを
滅ぼす力のある
誰かを探し、調査を

我が国が
掌握するべきで
あること



その国に「力」がある
この国を
守るをければ
ならぬこと



そのうち
現る全てのアンスも
アンス・ド・アスと
失うことになっても

その都度すべて
をかけたことに
してしまえば
いいと?



我がデモナスを
絶滅するのです!

またデモナスの力で
アンスを失えば
また隣国を
侵略して?



我が国の兵器を
掌握した?
もう一度「アンス」こと
確認してしまえばいい
ではないか



…我が国?

それはいい

この国の記録も
何もかもが
真実に解す

聖力のめい
あなたたちには
遠く向きの
最良じゃないか！

これで神使とは
笑わせる！

口を閉め！

静寂に沈む

聖者のように

語り付いた道で

すでに権力にすぎずる者たちが
魂を賣い合いやがて
魂人は食い尽くされる

あなた達の
破壊の物語を
突き進むがいい

沙汰浄などなくとも
あんたらほどのみち
自滅する……！





「おれは
おれだ」



「肉を潰して
おれ
おれだ」



「デウスを我々が
手中に収めると
いうことは」



「その力を我が國が
利用できると
いうことです」



「やはり
おれだ
おれだ」



デモナスは
世界の理を
書き換える...



百年前まで
あったがために
デモナス創設の
経緯はこの国では
失われた

しかし同校がアテナでは
その狂戦士が生じ残って
いたのです



—もうでじょうろ？



スイダラシアの
科学技術をも
伝説の狂戦士が
踏みつぶす



その存在は
我が国を再び
世界の絶頂覇者へと
導くだろう













カイン





オムネが
私の
影を
追っ
てい
まし
た



私の代わり
に
お話を
書く
者が
必要
になっ
た
ので



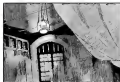
ん？



—はんと
うに
来
る
の
で
す
か？



早く
追
っ
て
来
て
ね













犬ってなんだよ……

犬……



下級兵士を
死んでいるのか？

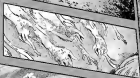


スキロスに
会っていた……

あなたは……









彼を乗せたまま
海上をずっと
泳いだ距離は

鳥に身体を
食われ続けていて



こいつも食われかけて
死にかけていたんだが
どうも悪魔が
強いらしい



不意に
倒すね

その様子は
魔女の魔法に
かかっていたので
しょうか？



かみへアスへ
早くも同時に
死んだぞうだ

そんなこと
どうでもいい
んだよね……

ファレナは！

次の襲撃は
いつになった？

ファレナへ
行かなきゃ……

やき焚いたことが
いっぱいある……！

お前は
軍には
戻れないよ

戻んだことに
なっているし
生きてることが
知れども
無謀の計画になる

私は今日の
審判で処刑は
免れた

おそらく
アバトイアの
軍医長官は
帰らされるだろうが

ファレナの作戦を
任せられるのは
私しかないだろう

……いや

……あんただって
タダじゃすまない
んじゃないのか？





お前が――

作戦に
参加できる方法が
ひとつだけある



私のものに
なることだ



私の進化になれ

リリダリ

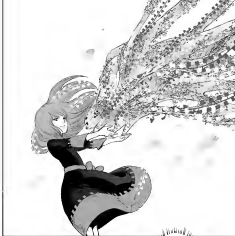
















お客さん
きたって
ほんとう！



お城の塔に
いますて

ねえ
お客さん
こわいひと
じゃない？

攻撃して
こないかな？



大に夫
ころげき
してきたら

五年間夫のときみたい
に
眠をばーんって

サイリウスで
打ち落ととして
やるんだ！

ガン















「ここでは
きういふルール
だからきうして
ちょうだい」



「タダでは
誰とでも一緒に
食事していいの」



「よかった
間に合った」

「ありがとうございます」



「エロウさま
はノノさん」

「竹の子
おでこで
きました」



「はい」

「喜んで
うしあげて」





!!



……また
魔法を食そう
なものが
出てきたな



……これは……

上質のミックスフルーツ
とろろのような
魔法を食そう

フルーツのミックス
フルーティで上品な
香りかう……

ふにふにとして
歯の隙間の中で
溶けるとける
……

い今すぐ
これを作った
料理人を
ここへ呼べ!!

オオマヤゴナクの
竹の子の水産です

さっき
料理して
こどもたちが
食べたものです

何け

話でただけ!!



































「タジタジはこの目、
お上をくると
一瞬しただけの
ようだった」



「はい船で
やってきた
客人たちは」



「突然の不意地な事態に
警戒したのか」

「この日は
彼らの国のことを
話してはくれなかった」



「ただ彼らは」

「タジタジの
この光の運命に
深く関係して
いくことになる——」



「その夜、
タジタジの
彼らは
夢を見た」





洞の中へ
入ってしまったのだ



小さな少女が
洞へ入ってきて

「その子は
手元に留まっていたらいい」



それがなんだか
悲しくて
泣いてしまっ
たのを覚えるのだが



少女は
洞の中で
不思議な歌を
唄い

洞りの
仕事をした



少女は
洞の奥にあって
軽がり出てきて
洞の外へ消えていった



皆、同じ事を
見たので



同時にには
客人の話題と共に
その夢の話を
もちきりとなった

だがなぜか
無印の人たちだけは
その夢を見なかった



不思議なことに
生まれた場所も
育った環境も
違えばずの

美しい客人
12人のうち
10人が同じ事を
見たのだった







彼らには
わかります

またよん



しかし
私たちはその事
を見られなかった
わけだから例えも！



ケルとノグモは
どこで学んで
花や虫の種類の
差を覚えるのか



ホシギンバナの花の群れは
風に散らわって
同じリズムでいっせいに光を
明滅させるのか



いさものは
不思議だと
私はよく思う
ことがあった



空を早く渡り鳥は
なぜ留行く先を
知っているのか

もうこの時!

私たちは皆
知っていたのだ

近々ジラの
動き方を
理解していた



あの事を反て
目が覚めた
瞬間に



そうか

あの時
も

事を
見てたんだ

あつちからとき
一瞬に事を
見るんだ!













私たちを
見つけておくれ

家の外で標を置く
自分の顔で出る
水子を取らんよ



千里の時間の中
必ず出会うけれど

標の位置のように
二度と触れられない

ただひとつに
なるようにして

無限のちからに
しかたない



みんなが
折った方向に
流れていく



「こんなお洒落で
願くとは」



全て
このあたらしいわ

「一度きりで
終わるとしても」



「一度きりで
終わるとしても」



「私たちだけが
お祈りを
知ってるなんて
ちよっと不愉快
ありますね」

「でも…
…ここで
家々が
好きを
行ける…」

「逃げられます！」



市民会館集合とは
社説であるな

おハヤトさま
お返すもです

若者の割合が
多すぎます

……うむ

……でも

見たことないくらい
綺麗ですわ



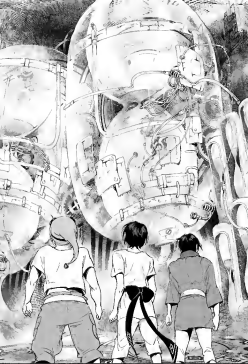
夢の身組／時





第20節 93年の落日









私たちは
大いなる悪人との
交戦を始めていた

きみ、

ああ
だめだよ

んー

ちよつとー
暗黒機械が
あるんで

小さい子どもの
怒への怒愛は
禁止してもらって
いいですかあ！

おまえだって
小さい子じやん

じゃあ
死タジキに
もどろ！

きみもいっしょに
あそんだげるね

あめめめ
いいですよー

ハスミルトお兄ちゃん
遊んであげちゃあぞ

ねえ

君は
いくつなの？

ぼくですか？







城をなさや
あたしたちの
価値はないんだ
からねえ

当然さ



ヤイミアをしじや
全隊員が立たないよ



あんなに
小さいな！
あんなに
小さいな！

そうだな



あんなに、
小さい子が
あんなにがらばって
るじゃないか



？



さ、
触るな



どうやったら
そんなに大きく
なれるんだ？



あんなに
国の人には
偉大な
偉大な





これが余の船が
用いていた
海図だ

海図？



海がどうなってるかを
記した地図のことだ



…どうなっているのか
わかりません



ふふん

そなたらは本島に
無知な奴だぞ



ここが
アモンロギアの
属する

スイデラシア
連合王国



余の船はここへ……

西へ砂の海を
渡っていったのだ









「…かの国」は
ここよりさらに
西方の砂漠にある



「あの……」



「世界の国には
みんな名前が
あるのですか？」

「そこから
なの？」



「名前を持たぬ
奇妙な国よ」

「名前がない……」



「その理由は
わかっておらん

「おそらく信仰上の
理由なのであらう」



「かの国」の人だも誰も
本國の名を持たぬ

「番号や動物の名前などの
通称を用いるようなのだ」





私たちは「目」二重
（目付けと重付け）

夢で見た不思議な
歌を聴いて
死タジマの行く先に
折りを待たせた



この折りが
死タジマを逃させる
力となっていることを
知っていたのだった



あなたの内側に
あなたの外側を映し出す



あなたの外側を
映し出すですよ
死タジマ



私たちは「目」二重
（目付けと重付け）

私たちは「目」二重
（目付けと重付け）



……この庭には
疫病でも
流行ったのか！

それとも
お方の座からの
詔で、大人は
死んでしまったのか

……疫病退治した
とおりです

……お方が
詔命だから
死者が多いんです

……
お方の座の氏士は
この庭の者と
同じ方を扱う

しかし、知命だという
評は聞かぬ

……
知命を種族など
この世の中で他に
置いたことがない

……この庭の氏士たちは

何者なのだ？

……







サイとアが
使えなくなった



――

何故か試したが
無効だった



だから……
次の襲撃が来ても

俺は構えない



スキロスの時のように
メーヌを破壊できない

もう俺に
頼めるもな

そんなもの
毎日持ってる
無駄なんだ





お母さん
を……
を……
を……



体面をダラの
メンバーは
オウニとニビ中心の
グループと

オウニに誘われているものの
ニビとは折り合いの悪かった
獅子シコウとシコン達の
二選にわかれていた



そいつみたいなの
お前ががきどもに
ナヤムヤされたり

さういふの

言葉に
期待されたり
あの強面の女にも
優しくしたり
してある……

優しいのかよ



ニビがいなくなつて
弱つちまつたか？

ニビの代わりが
ほしいのかよ



あいつも大抵

甘ちゃんだった
からなあ







世界を
見てやろう——

アモンロギアの客人が
選別してから
翌日が経過していたこの日

雲々夕方は霞面から
「アアレナ」の船と呼ばれる
美しい船隻に遭遇

砂ヶ原村
8月16日
1993年

なんだ……

なんだ
あれ……





見て

「海流の中を
生き物たちが
あんなにたくさん……」

「海流「フナレナ」の船」は
本と死の境界
探すと廻りの世界だった













原因は

近々さまよ



この時、
本館の館を
防衛に導かせて
いるのは
彼等という生き物！

私の國の人達は
「マース」をマースに
与えるかわりに

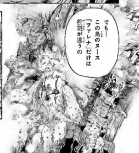
「マース」という

能力をマースから
授かっている

それが、印と
呼ばれる人々



ファレナが
食べているのは
薬膳じゃないわ



でも！
この島のマース
「ファレナ」だけは
お母が通うの



「これがアサレナの人
たちに与える
最大の報酬なのよ」



愛を結ぶ
心は残されたまま



運命の呪いが
子孫まで
受け継がれていく

誰にも
見つけられず



どこにも
逃げ場のない

命を賭んでいく
呪いの毒



それが
この島だったの



ガラク



17







知りたくなかった

だから
避けていたんだ



自分たちが
「隠れ家」である理由を
知らないのだろうか？





驚かして
おどろかすんですって



それって俺たちの
たたりなの
じゃないかって



どんなに
ちっほけでも
大好きだった



俺たちの
光クミナ...

「おれは昔からベトナムだ」

「俺たちの戦いだったんだ」



おクジラの
身体は、
重く固められている

小石でもすぐに
傷が付くから

「海」にとって、
海草は、
船の物語の導くところ

「海」は「海」の
物語者だ

成る記

紀録者の 海歌



壁は傷むと
上からまた泥を
塗られ修理された



カキコ

また吹き付ける泥が

砂紙の粒粒を使って
書き傷をすぐに埋めて
しまうのだった



だから「僕」は
すぐに「泥」の記録を
書き写し回収しなければ
ならない



チヤタロ!



狩りに出た
田がレキヲブを
狩ったんだって!

うー
大きくてかわいい鯨だよ
見に行こう!



チヤタロ
聞いてるの!?



「オレ」は「僕」の
隣人の先生
でもあった



すくは
「泥」の本人(う)だ

「僕」は皆で遊ぶのは
嫌いだった



二人が泥タラで
組んでいるのを
見るのは好きだった



泥タラはまるで
大きな生き物の
ようだった

人々も建物も
降り積る砂も
全ては大蛇の
体の一部で

彼々の呼吸が
泥タラの鼓動となり
血の管は空から
砂の体内へ繋がっている

こんな国の中を旅を
しようとありに
害物として捕くたさ
れたら……



「僕」が文字を
知んたのは
数年前だった



まだ小さかったし
僕は文字を読まない子も
多かったからなかなか
知んてはもらえなかった

が「僕」はいつの間にか
肩を寄が傍っている
難解な陳文字さえ
習得していた



本来「僕」は使わない
それらの文字を
知んたことで
特異な目で見られる
こともあった

そんな「僕」にも
師となる
人がいた



また来たのか

おいで

チヤク白の祖父
コガレ師

「僕」の
文字の先生だ





ササキは
ハイパーダラファイだった

書く強さを
知んたわ
読者の魂

この病は僕に
全ての事実を
ありのままに
記述させる

ただひたすら
願うんだよ……



別れや喪失
悲しいこと
罪や過ち……

この世界には
忘れたいことが
溢れることも
あるというのに



その夢は
儚くしくすら
見える

……



……わから…ない



……ところで
おまえさんは
すぐ文字を
覚えた

とても
賢い

をのになぜ
自分では何も
書かないのだね？



……あの…中は
物語で…いっぱい
をのにな



あ、あるものを…
書き出す…ことが
できない



……君も僕を
怒らせているのだね

……だが



今はこのままで
いいのかもしれないよ



まるで何かに…
動か…されてい
るのよ！

引っ張られて
引き出せない



「キタジン」

洞にもチャタロにも
きつと文庫を
「怪獣」があるんだよ



書き続けることを
命じられた
「彼」と

物語ることを
命じられた
「彼」

納んでいる
僕たちは



いつか自由に
帰りたいこの世界を
書き出すことが
できるのだろうか

「キタジンの物語」を
得ている
彼らのために

星野の物語 / 前

キタジンの物語は砂上にあり / 後



平成27年7月25日 初版発行

発行所 秋田直業

發 行 所 秋田書店

第12卷第1期 2015年1月 第10-8页

800-441-1111 300-222-7777

800-441-1855 • 7327

800 1-370-0-650/50

印刷所 三省堂印刷株式會社 Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上の罰則を
 科せられています。本書を貸行図書館等の第三者に譲渡してスキャンや
 デジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権は侵害です。

2011 年 11 月 11 日 星期五 11:11 第 10 页 共 10 页

ISBN 978-4-253-26105-0

2013 年 6 月

製作所 デイジービルカネバルト株式会社

<http://www.daniel-catala.com>